

主体的・対話的で深い学びを実現する質の高い探究のあり方
—「地域の現地・現物・現実」を中核としたふるさと学習の実践を通して—

南箕輪中学校(R7年度竜東中学校) 月岡純平

研究の背景と目的

現状の課題

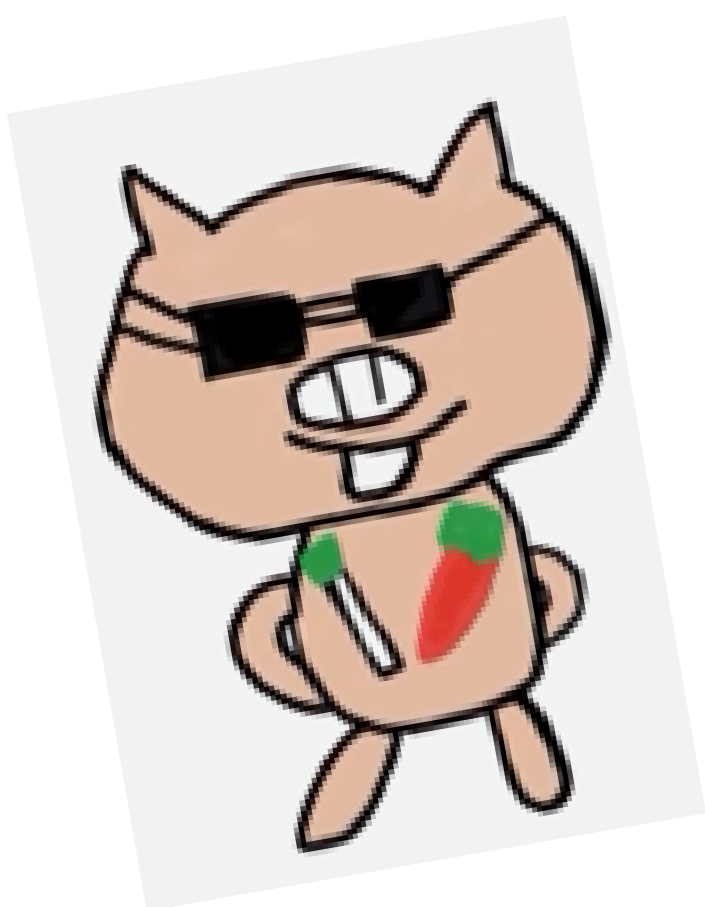
「ふるさと学習」が単発的な活動に留まり、主体的な探究に至っていない。

研究のねらい

- 地域の課題を自分事として捉え、生き方を深める「探究」の構築。
- 小中高の学びの接続（特に高校の「総合的な探究の時間」へつなぐ基礎力育成）。
- 探究の高度化：整合性・効果性・鋭角性・広角性の検証。

指導の工夫（3つの柱）

- 「地域の現地・現物・現実」
多様な関係者（地域住人・行政など）との対話を通じた視点の多角化。
- 「入り口は狭く」の徹底
あえて材を絞り込むことで、迷わず深く掘り下げる探究へ導く。
- 「学習問題—まとめ—見直し—振り返り」の定式化
問いを明確にし、毎時間の学びを次時の意欲へつなぐサイクル。



3年間の学びの深まり

年次	テーマ（単元）	主な学びの変容・成果
1年	地域の魅力再発見、アウトドアリビングの運営目的	魅力の分析を通じた客観的視点の獲得。「なぜ？」という本質的問いへの転換。
2年	地域の課題PR、道の駅づくり準備	「発信」から「課題解決」への目的意識の発展。思考ツールによる情報構造化。
3年	農家民泊の探究と持続可能性	住民の生の声（現実）に触れ、批判的思考で探究を再構築。情報の分析スキルの高度化。

考察の成果

探究の高度化：負の現実（反対意見や厳しい現状）を知ること、主観的な「やりたい」を客観的・論理的な探究へと発展させることができた。

スキル定着：ICT（KJ法、テキストマイニング等）を活用し、膨大な情報を可視化・構造化する能力を習得。

指導の有効性：教師の適切な介入（入り口を狭める）が、生徒の主体性を損なわず、むしろ加速させることにつながった。